

Kodak

LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Centimetres

Black

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

17 18 19

B

M

A

奇談環雙紙

仁

184
1

石川...

奇

713
184
1



13
184
15

於 184
1

新 亥 享 和
刺 和

奇談環雙紙

成三樓主人著

鳳嶽館版行

全部五冊

明治三年十月十日 千葉磯城會贈



あしき へびと
 芦垣の隔あふもの伝らう 御館の娘君のりさうりあの
 との 女房と使とくちるものあが免れ侍位然るなり
 何ぞ 喜きあやあるを所が嵩後乙姫の常あふぬ心
 地や ありの物語あるハ化世の娘双帘薄雪物語
 ずの物々ハ見ド少あり〜文〜國の物語るん
 と種〜て妙小巧て奇よ縁きる英草紙 腹く夜話
 等れあふハ教を〜〜文庫よかき免る夕夜話

環雙紙序

文小苑ありん小實あれば今少く一年もおやあしくたを
 終ふくも終せしめしんあを彼らんどん曉が雀の言と切
 ころりのごうとさうさあ何あを拙中言棄れ終ふ
 笑ハ白へど敬きをの致斗をて書たさかぬんあ叶さふら
 うみさるあれおささぬとてまげられたゆ返来毛のまま
 ひざがくんあさばいさるんてんはも作てゆめさせうや
 あわくあへりれは中南れ海乃いあさかさふ浅香の注
 のあささるる夏と記てまふくせ考るふ至るは氣はあはるあ

阿波の藩乃あさや有下堂の真回れ終橋次をアせよと
 以候あむくありふ今ハ中く發憤給らんを候あ
 れ候思ひく二枚書はけてん見へるうりれ五枚を
 てん奉るわぶ終小五乃巻とらりぬ昔や此あを
 取敵く終ひて井子のああ影浅き娘おををの
 見あらんてん本意あれども候あゆる音羽乃波のた
 ありた人も白系れ操あして侍堂濯川の見えんせ
 む羽束乃山の恥くく入るを成二橋ある次

享和三年癸亥年

正月吉祥日

惣目録

○第一之卷

一樹いしぎの蔭かげの事
新あたられ手て枕まくらの事

○第二之卷

權ごん求もと淨じやう土つちの事
想まが夫おとこ窓まどの事

○第三之卷

般点玉乃緒の事
甲斐志を在涙の事

○第四之卷

再雞の音と眼事
先世の宿業と知事

○第五之卷

繪次乃車
九度の杯の事

以上

奇談環草紙第一

一樹の陰の事

以河の時代まぐやありんうまはけれは佐野の舟楫をたあたる
小原の左衛門何某が其子小同一き宿業をまかす
まはけき艶ふ笑くかむ之優あやさく初より志きつれ乃と
聖賢むちやん取まひ唐歌表曲歌るといふりぬ
控ひはく徳は双帝取あるとしてはるの先祖むい
と志るはあて下りしより祖父の代への急家や久いと目おれ
るまらぬが今父の代とあるまぐ一ぞくとり小横飲せくと目
ふちとるるは月と取あつてぬるが日かろふさぬるはれどその

り成らふ所はなきもあし相うまひもありのこのまゝ
 知るまよひありてふあひり世ふあつし時世はたる能の本後
 とほめ繼てふりの持おこふらと樂はあたるるをと樂とて
 くりしけくもよたどうせらるるも厚りあがれくは濱やまん
 深き月れやうらま相を憂て繁るてい新とやありたると
 喜ありあつちうらまはけくひのまてちははれ老の末と樂
 未とまてくまあつちうらまはけくひのまてちははれ老の末と樂
 るふ後皆ちりてくはうらまはけくひのまてちははれ老の末と樂
 り家申ふふれいらくくはうらまはけくひのまてちははれ老の末と樂
 そののぬき都ふあそくふふありのあつちうらまはけくひのまてちははれ老の末と樂

いまきららひこきてあつちうらまはけくひのまてちははれ老の末と樂
 て於一やうるあつちうらまはけくひのまてちははれ老の末と樂
 者ありてくはうらまはけくひのまてちははれ老の末と樂
 てやんとるさくはうらまはけくひのまてちははれ老の末と樂
 相もあつちうらまはけくひのまてちははれ老の末と樂
 るひまあつちうらまはけくひのまてちははれ老の末と樂
 天原日住まはれあつちうらまはけくひのまてちははれ老の末と樂
 つまむねあつちうらまはけくひのまてちははれ老の末と樂
 なるちうらまはけくひのまてちははれ老の末と樂
 境のらのまはけくひのまてちははれ老の末と樂

つらり程の教ふとまり能く成りて先教傳の乃きくめたり
 けく程のくまきとまりとん然るなりたまきの心服をたまきれ
 たりとあせとありなるよそ父のしる傳の去事あつてこれら夫
 婦世ふ氣業一昔の愛まはろしとるさき今のや又十四十
 けた川老といありぬさして孝ふをぬれに相れ淋一き習するみ
 増てくおちぬれたれに惟修きもるく相とほや相とて傾
 り形踏ふ教のそよと居れく袖の赤紙さそひ破れたる様の相
 尼と海さそぬ時ぬり夜海さ着をさるに斗あれと和服の神めふ
 いたより居へいたそ志のゆさぬもがたあるみさをた膝後うた
 らちやとあんこ相うやくとや傳れまふ階ても嫁に茶をうた

己のあつて破れ一室の松風うきまき夜さうを寤れぬときも
 一きうさも志ゆを樂むくともめなるみ家貧あての親習さく
 たり今まで能くするにれに憂しと知て居るりのるまき獨り森の
 さそや淋まあるらんまきてい忘憂れ相めてを召り控樂ふ野心
 手折らじたあときたうまうふと思つても夫さ人もあのかきぬま
 尺の着果二人りをいさそよゆその像よ一箇ふあまうて唐土
 人の和の文あるとるといくたぬふ斗るれはやくと氣もむすぬれ時
 然痛ふ不潔ゆふともあらんうとあぬとまて思ひ色一まあつ
 さるそやまきあうく角ひまうけあひ一とてなめまのくを
 けくま川らひたのといくたぬらんよりやふ傳せりふする

一と忍び深く望みれば母の河なるち打ら川しとるさぬを
 父上免しゆふ人の力ありさだめきまゝとて返くも之を
 をすまゝあふあふ伏流てそとふる春なる余りありと
 さゝ娘流と交え兼てをさゝか細くかあられと人さりのあ
 ぬ乃るありとてい死しとささくさるるをささめあもあつねと
 づるささり人の久し東路の佐野れ舟楫よりなるさくぬ
 らぬきまゝの暁の空を限りささちつるくしてを溪間のま
 伏栞校の原れあふ宿りてさすさひ作りしやと清水
 の里といふあふさるるぬ習りぬ娘す乃をもささくくく
 誠なる山嶺もたるるふささふさつ川めれ四方れ捕ま主目と

一と忍び深く望みれば母の河なるち打ら川しとるさぬを
 父上免しゆふ人の力ありさだめきまゝとて返くも之を
 をすまゝあふあふ伏流てそとふる春なる余りありと
 さゝ娘流と交え兼てをさゝか細くかあられと人さりのあ
 ぬ乃るありとてい死しとささくさるるをささめあもあつねと
 づるささり人の久し東路の佐野れ舟楫よりなるさくぬ
 らぬきまゝの暁の空を限りささちつるくしてを溪間のま
 伏栞校の原れあふ宿りてさすさひ作りしやと清水
 の里といふあふさるるぬ習りぬ娘す乃をもささくくく
 誠なる山嶺もたるるふささふさつ川めれ四方れ捕ま主目と

さうなるごとく髪れきまらるる雲とりてはけるごとく嵐ハ益もてむ
けのこゝろいゝ網を眼のあゝるまの岸紅をまらるるごとくゆて
一度笑きまらるる國とて城をも傾けしごとくあはるるま
たはけりくわりの格たつてまらるるぬ山里のまらるるの昔
々る人下るる昔の海落れ終て外猪の床の其中おあゝ家
あてやうある女乃任するごとくこのいぬうーまらるるいゝの揚貴
妃の蓬萊宮よとまらるるまらるる小智の局の傍縁野小たれ
せせゆひーまらるるひまらるるあやらんと暫らされていたるいゝか
同い類のまらるるいゝはけぬらまては目馴もやゝぬく目出度
まらるる男は蓬萊の糸の乃の辺お休むひゆひまらるる長膝う疲

ゆら痛へーやうある健るる人ふて憂身の上のまらるるも頼まらるるを
まらるるのまらるるのまらるるけらぬありさぬら未央の柙の風あゝいな
ふまやまらるるん笑雲の紅の霞乃傍らまらるるまらるる初らんまらるるま
て春夜があらをせ霞尻目おけけいゝ今裳ふ意あらまらるるまらるるま
風情とまらるる春夜は氣も消魂も飛を地とて乱れあひいせあらあれ
や早くもまらるる清名のまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるま
まらるる居らるるまらるるの女は旅人の川まらるるまらるるまらるるまらるるま
まらるるのまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるま
まらるるのまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるま
まらるるのまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるま
まらるるのまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるま

豊直氏

五

と物ぢやうし路用のまぐね太刀衣類己下の物とて死んでま
 さいまひとす家曲者多くおまけあり時刻を移しかまゝ
 つらある浅様しき目とも死たまふつらん急まむらゝの根原をめてよ
 めの氣磨川を引ひたたり更の海万の里とそより下りの街は出
 さるゝあつむと見れふくとおちのちを春あはす後ふ忍ろ
 く身の毛もよぶ川をくりまゝ急彼里をさると片とひあひふ
 浅間ヶ嶽より多くはく焼るるふとかくとまみぬせもやらすけ俵
 よこあん事のもむかふふ心ゆゑ後髪名残の久も取はす
 女ふむむそれうへうまはけの園らり都ふよりそのあつが極
 乃よまひひりりや降姿とままゆすれはやうの秋浅き玉あ

の深くも我をかりひゆし所志の程遠くくさゝい教ふまゝ
 つつとまきうのまを糸はるし朽せぬ縁よりまかまゝすまゝい
 も遠際みりりまきと遠ふゆの乃まゝを丸めむむむむむ
 せ度うとくくとおまぬれはく行んとすむ杖とまゝと引
 とまぬおけのゆかぬるえうしりめくくやあひゆらんるれと
 一樹の蔭も宿り一河の流を汲も是皆他生の縁とくやけ木の園
 小やまゝひゆてそ先の世より深縁あるら免されい後れ世か
 けく頼まゝのせまゝ死しものなるりゆてまむむひひそよ極
 なる父もまゝく母もまゝくため向成るの故あまやけ清々の里
 久向の三郎行兼とゆふ人うはまゝれて侍るありけんるる武藏

園まで入るの何某と入るもされしものふる由故あそびは
 うつされさす人の身とかりても生受たる悪行は後やまは
 毛殊に戒の教生とぬそものりの敷くぬ召くして深から分入
 吾うはくも態猪様のを持てすまものとする也本名は
 入るるれとも入を久く直く久居の三郎と申之して又續て得
 抱のあらた時上下の旗人を追搦すともあそむる此幸の妻は
 も深くかくせしむるもくまをまよく知りてとくふるその
 妻とつるも同じ國の人あるは兼よは似して心してやせ
 しく情も深く女のつとるも強能勤めはく旗のつとるも身
 ろしねとも春より夏へ誓と銅杖より冬へ糸をとる機を織

海原舟一の仕りも 枕巻も何くもかぬその中に唄奏
 と旗まのむも里乃人いり秋琴の琴とやん之もつとるよ
 も其まをを教はく中も糸をとるも旗よりとるまろくは
 くることを得たる故環くとよられは表のたぬ夫婦れ
 酌みよぶるもおもぬ琴を弾ぬよ深ぬ身を想ひ戯れは
 うそ女房も教ぬある中ふもくきも香小めてもや今も
 へるひかると知せても振分髪もくもぬむの山に初ぬ
 きも一人一言染ぬ身を切おひひもあつといと小空を貝あも
 志はく袖の着人よははくむとおひひも妻もままと打たし
 ころもをいひひりのとるぬるきも極るよもあつとるも



山崎の道



玉草糸

去月の隙とて事成らねぬ團のかけつめんと欲する情を
 けりまての延引し侍りしあまのひの女入後の罪海へして
 けり月のちりもて見そ免え入りしり猶もその形ぬり侍
 詫しありさぬあれありし情をさるあつ東の方と待す
 して出しけ相思ふをまてこそとてもむとて身の内を
 空義秋の病死拂ふとてまてとてとてとてとてとてとてとて
 つく成て世の報もくわる面のまけけるをぬのようぬ人
 思ひけりし我とて身を恨みし情もつとてとてとてとてとて
 秋の年もはまりれ涙もたれぬはぬれつとてとてとてとてとて
 とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

茶の湯の湯もたれぬとてとてとてとてとてとてとてとて
 きのふとととととととととととととととととととととととと
 まろくとととととととととととととととととととととととと
 たる國をも君のさきとてとてとてとてとてとてとてとて
 小誠なることありしえよりも實際のまきとてとてとてとて
 心のあまのハを文書のまきとてとてとてとてとてとてとて
 まろくとととととととととととととととととととととととと
 病の恨しとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 の心も小きるわ物なりとてとてとてとてとてとてとてとて

なるけ二つは月ひかりおきしませとまぶある枕の夜よぬ
 終ふの端出る月影みぬ雲か風情よく涙を袖あけうし
 けくまへるくそまこく春名はもの物うらまぬけ
 心の内押さへれて哀よととく是そそよのぬぬそのこ
 おり人も物かぬとやうにぬれおそくもものより悲よ
 のその大勢あつとすけ女を召具しうぬと聞あつたや
 も返うけやううけていふとま我をぬぬぬぬぬぬぬ
 何と云ふ人舟への心身を大切されされとわめく頼まれ
 けく我もけよと物んもいふたまたのそあつたあつら玉の
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

あんとまゝ方もさく向も真夏向ぬもけく玉草終り
 時そ人の死らん能得ぬのけむにあらぬをやくりよさ
 之やと後の時我あやしの女座れたるも是をまて後ハ
 何とてうらまへ何の急ああれ色足出で家をハ身をたぬ
 とよ今乃女座しそ中よむとぬのあまの妻よてけ今
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 あやふ此乃をまてさう適はぬんとおのひもあつたけ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 も猿狎しなるふこの急あれ物のは理もまたうらまは
 へあつて何もせよ涙万りつとまていふぬぬぬぬぬぬぬ

多し御座る福了春夜の例りれの様りいさまり紀て御座る水
を多し御座る是をあら女伏まろ人の男り助けあつて脊
ふりせり振るとよお登りむり左に申格のやんことあま
所方をすりしあひせし身りも長くもるれも思
の福の同くたひもやあんと多るも二人の多る角ふり
さうれはくあうりて浅月の里ふたさうはく

新の玉草の事

去後小寺の縁りも多るぬとほけれいと何の駄小者り
赤免多引結ふり松ふとまてつれまらるるひいひのち
もちしまた福のさかたやまし福くまれ髪も遠く人

の骨小丸は娘さうさうさうさうの梓弓をよまもぬぬり
のひをほく一のさうとぬんとあやゆめとも遠くは智
るかしてせの互小契福る娘さふ後光のさあ忘れぬま
のさすていと細やうふかいらひはく松根のそあうさめ山の
端さうむはまもさうぬさうまて滑るる乃さのさふぬれ
さうさう入るる福べいよありはや川はう袖をさぬは山
ふりりての鳴林も下ふ多た若ふ下てハ川音も空ふす
方新先小人目もさぬ聖徳をたどり本方の様々さうけ
お後さう酒樽がみの玉も築まてぬやらぬも園死ふ森
さめの森と離さうと振るとよめる殿りて地れる縁さう

玉一系
を助け名も人れ合ときつる海を渡して、疲れを忘れ清水
の里の音信もまかれいせい漱安き心地して、穀多稼藤も幸
まで兵濃國青墨の宿ふつたぬ、春夕乃い深山のあじ
の多ふおあされてや風の心城とて湯あともせ守備あとも
あともめ守衣の衣引く月つて赤外ぬるまらたの春夕乃ふとも
く取散一たる物あじのこよせ夜あじたるこもりる廢死
坐あけつるささふ屏風引まよして燈もくを、つ小鈴はを
よぬもも声もともぬあむるな、はは波のささの丁名ハ
よららさをささるありさぬき死むうもともうなれて表之
さしてあふんおられる入様のあひひたるふ病の人をいさまり

はくごせるるるうひともきさ人秘どもぬるたのそそ本あまふ
秋津さばより窓あともく風の音まきり小川のあ塔
てや音響もよきさ入つて物まこきふ無鐘の音もつたぬ玉
くけりぬてもとやまぬ風の口は借出さなき極もあられはらふ
一日とてあまの跡争る病の床舌をもあててをとをう強く
一医師力を尽してつる死と免る玉の証も合といふ物ともう
秘へ七の級もん斗ふて環かまひのやるかこるく、秘伝をを
言を招てか持好禱をねえけいらく、寐たし八十一歳の老人と
詠しる神垣のけ垣をなれたあもこ、成ともびはくともあふら
くまゆらう命とあま守のあくとくう、いんもあれたありさぬよ

四葉書一氏

ちりちり若女舟のき切る旅とふあしとあしして平妻を
 ちり先石はのりのもつとあぬやう中食はく心とあてあま
 つらつらりりかくてはあしくあやる奇特と平はとあうまゆも
 確うその口をきいて二十日なりは日殺るくその身とあうて
 りう珠文環をねひ一かたあはは後川ふあ増して返り来たる
 人小遠くをの地せしはままぬも病をば氣のぬけ取中さん
 とくし籠み愛とまぢう人妻も有なりとあつて人出候の面を
 せつ元きなる環はそまふあり合致引寄候の一ゆきをあて
 なる其時妻や及言葉とぬるさふりゆ縁一衣の縁の宿まれば
 けせあしぬ契とぬる増ておのまはもあは病を文とてよまぬ

及かりなる旅の厚き山芳志とてその身とあままは旅しは
 中く謝しまつてすなまし言葉ありあては宿の料業と下の費
 候あしん結るう敷ふよるもゆもあまし拾ふう八分きたれは
 一物もあく外ふまのすなればふしやうとあうやわてあう
 せまはけくちあまの者ふうとくいらをまあまびの費をばくの上
 まてのこいつとやまめう人しは復の雲井うななく縁を目をな
 すしてとぬしひまのしん又び一腰りせむふよるもあまし縁と
 家ふつて一品そは先あまの引出物ふあせはとまて人ひれは
 あじいし相せぬ引出物後す祝忌殺るまあうけ者ふ信と
 まひしよるもその費いら計とあひゆふそえう宿まれば

え家のたのふよりく下りぬも若のしくりふむ女
 をめくくたまふいふあふあふとれさせまのあやせ
 おとまのせむせむぬあり候命まのすもせ下り人の若の
 料ふ十倍するあり若の妻よ某方小物のゆふよりむつ
 けよい方保ともは二人の法中よ一日後二十廿一後二十廿
 一中後居たそは二十日廿五日の日記を念せたる拾公書余
 こそぬまのまのあれす一葉除雪の法れおの若ゆふのま
 細いおのまねともあふせまの茶と煮やありそは旅人よ若
 妻の人といふはあふあふと念を才角志て下ゆふま
 張一のゆふとせよあふあふと念のそありひてやまふ

引致す一まこせゆまのの人をくくん僅小身命を泥
 ろく来るれは後方より来るる再ん来るのまを泥撥と
 あふなるまの物を踏一のうくまを下よくくの人のまあひ
 初まのちなるまのくくゆまの理がよそやなるは環る絶えれ
 頼るたはけは中かふたれ利きる旅とて言ふ旅の塵を
 飛して強したる琴の妙音とふん一かろあふるとおもはれ
 旅人もあめりふたれ徳もけくたまののとおひくくくはる
 るま一其時若方首ふのきる守袋を一軸をとつては是ハ
 他人の持ち用きたふあれとも我身おしては是ふ又坊とて
 大切なる物もあは家の系袋とくかきするつとも果ぬふ

氣久そくかしの擧げあるものを預まひせしめん
 君の出出遊ま時ハ取小食ふる物ありてハ叶ましくなること
 とらんふよを短くも愛中さぬそや足たふあれハ又世ふ出
 便ももるもく系管の外ふいうる物れ愛ふゆるや足より外ふ
 物のあふあふハ中さぬの人愛ふ得せまろくすなるとまて
 弥多まをそぬさたよりもそのはな祭のまろくま不しく
 えぐりーありまあつてより中出まあるれハ入人くともま
 のよまーめ何さぬうも大歩袋くれり入るころ扇ふ
 魚丸も中うの外めん身小は死るるものもあられハ
 久香と入るる女房をまねぬつめりまらくまをたれ

むらりよりりして又来る月のりまてを跟てあてあれ
 ぬハその目をそとくく一人ハや代物くくゆらな
 其時悔ゆくも後そあうんげまをまふゆハ
 まろくまをこハ愛ふとくく教りあむも申たつと
 あつては短ふらんくくまろく有ねあ付くもるうり
 日々春度ハるう後ふをまをりまろく情をたて成ぬる
 そのうねば女を果うやうもあそのうそもあつて
 ろるこの故あつてやねろく送届うまて入るかん
 ハそろるる人愛ふハくくかまろくけ上のは芳志ふけと
 斗ハえてまろくまをゆ人やと流くもろくまてくふ

ととく人々を振るるあち今の世とををさすくも
忘れぬ人々や某うそふねせんとしておぼれ用よ
もる死問答無用ありま者ともと声うくれぬごん
るれと一間の内より寤まの若りのと人けつと出
環を囲とむらさかも死にけあまさぬをころるるま
とせまぐる後の留らんまやう敷をらんまうしと斗
抱をりし隙もあくもや音る人ぬらとの一しとを名
うく引立られし心の内をうとくれくあまりあ
程う春や及のりふくこの急るふ陰さ人まきね
るく我をももまふと立あられのそ時をしくとまか

うと表の方へ引立移門より外人ありをる門無名の
改ずるありはるされともあまうこの大勢さるるへ人
殊ふ病の致るれはまき中うもあまきれをては
より外のことぞも死をうてもは終ふ別れ果るんと
のうりさふりあもあて今一目もしくくもせん
抱とおの人も環の奥へあつておれ我の表へおれ
るまれ門の戸さうて入されのそ力うけあま
ふをる死抱とせなやとまてあうが象身つ門の
さもあまぬれ旧里を出てよりあまのそ目をを
ふまふまの若後を喜ひまうんがおのそこつ

八尋小葉の葉の葉より環うくわん経ふあををえろのはうろく
 清きよあをを報ありくうら原へ出さん人ありくひとりまき
 都みやこよ上りの序し思し未あ未んををせきくハ叶うらゆんとるもひ葉はと
 かりくとふ破やぶの夏なつ後ごをを歩あらりあらううつつをや
 すれ川が神かみ小こ使つかふふとると心こや丸まるををささううせせりりととままりり

奇談環草紙第一卷
きくたん かんそうし だいいちのまき

